

痛みのクリニック科

部長 須賀 太郎

当科について

2020年の延べ外来患者数は前年と同じ程度で推移し、診療内容も同じで、事故もなく、治療を行うことが出来ました。

当科ですっとかかっているテーマは『慢性疼痛の患者さんの鎮痛法をより安全に行っていくこと』であり、この1年間もその目標は何とか達成できたと思います。痛みの患者さんは70歳以上の高齢者が半数をしめ、また体力のない人や合併症の多い患者さんも多くいます。どんな患者さんにも最良の鎮痛を目標として診察してきましたが、現在行っている安全で低侵襲なブロック・キシロカイン点滴・電気針治療をベースとして行い、月に50人程度の患者さんにはフェニタル貼布剤やモルヒネ内服などの麻薬を使用することで、その目標は達成されてきたと考えています。また最近、NSAIDsが特に高齢者に使用することは危険と言われるようになってきており、NSAIDsを使わず他の鎮痛薬を使うことも心がけました。

帯状疱疹後神経痛、脳卒中後中枢痛、脊髄損傷後中枢痛、脊椎手術後疼痛（FBSS）、腰部脊柱管狭窄症、閉塞性動脈硬化症（ASO）、手術後疼痛症候群等々、難治性の痛みの治療を前年と同じように行うことが出来ました。

突然ですが、私も70歳となり、当外来を閉鎖することにいたしました。難治性疼痛で継続して治療が必要な患者さんとは、相談をして、希望先に紹介状を書きました。特に希望先がない患者さんには、治療の継続の必要性をお話しして、その多くの方は、高知医療センターのペインクリニックに紹介して、治療の継続の必要性があれば、治療を続けていただくようお願いしました。

ペインクリニックの治療は、各施設によって、治療内容が異なることが多く、患者さんも、慢性難治性疼痛の患者さんが多いので、患者さんの治療の継続性を保つことは非常に難しいことだと痛感したことでした。